標準ルーブリックとは

・ルーブリックは学習者に応じて作成するもの
　⇒　育成したい能力・人物像を明確にする。
　⇒　まずは活動を観察し、指導者が徴候を整理して評価基準を作成する。
　⇒　生徒の実態から評価方法・基準を検討する。
　⇒　日常的に捉えている実感を可視化する。

・指導方略を“標準化”するために
　⇒　学習者と指導者が、共通の目線で活動を行う。
　⇒　教員が生徒のつまづきを理解し、共有する手段として。
　⇒　生徒にとっては能力を伸長するための指針として、指導者にとっては指導方略を立てるための目安に。
　⇒　初めて探究活動の指導にあたる教員が指導の方法を理解し、戸惑い無く取り組むための有用な手段に。
　⇒　各段階の質的な転換点を明らかにすることができる。
　⇒　「徴候」と「基準」をしっかりと区別する。
　⇒　「チェックリスト」にならないように。

・評価に生徒を合わせない
　⇒　評価基準ありき、では生徒の主体性を奪いかねない。
　⇒　既存のルーブリックに生徒を合わせるというのは全く逆のこと。
　⇒　“レベル〇〇”や、“〇〇点”というレッテルを貼ることが目的ではない。
　⇒　学習者と指導者が現状を知り、どのような方法で、どうすれば成長できるのかを知るためのもの。
　⇒　ルーブリックに“食われ”ないように。ルーブリックを“飼い慣らす”。

・“主体性”を可視化
　⇒　探究的な学習活動の成果として、論文・ポスター以外のエビデンスをつくる。
　⇒　“教員の抱く印象や人物像”といった曖昧なものはエビデンスにならない。
　⇒　“主体性”の変容を、学習者と指導者が共通の目線で認識するための手段として。
　⇒　人格ではなく、プロセスを可視化して評価する。

・「観点別」ルーブリックは必ずしも必要というわけではない
　⇒　「評価のポイント（≒評価の観点）」＝「教師が意図的に育てようとしている力」
　⇒　活動が何かに特化していたり、その力のみを測りたいときには非常に有効

・学習者との対話を通して
　⇒　【問いかけ】→【傾聴】→【評価】→【具体例の比較】→【次の目標に合意】→【記録に残す】
　⇒　お互いが目線を合わせて行う対話が“気づき”（メタ認知）を引き出す。

高大接続と標準ルーブリックについて、大学側の意見など

・テストの点数だけで生徒の能力を測ることが限界に来ている

⇒　一般入試で入学した学生の進学率や成績の低下。特に思考力を要する場面に弱い。

⇒　点数や偏差値のみで輪切りにすることで、入試の時点でチャレンジの可能性を奪いかねない。

⇒　総合力は必要だが、それだけでは突出した何かを評価しきれない。何かに“全振り”した学生を生かせる土壌は大学には存在するはず。

⇒　“教員に評価される生徒”でなくてもよい。しかしそれを測る方法が必要。

⇒　とはいえ、入試に出ないから、と、意図的に特定の科目のみしか勉強しない学生は要らない。

⇒　入試のための勉強や、入試スキルを高めることに特化することの将来的な無意味さ。

・（今後の推薦・AO などでは）論文など、最終結果のみを評価することにはならない（してはいけない）

⇒　教員の操作や支援が介在しやすく、生徒の力を測る指標にはならないと考えられる。

⇒　テーマ設定から結論まで、教員の作品展になる可能性。

⇒　コンテストごとに難易度が異なるため、受賞歴は（ほとんど）当てにならない。

⇒　限られた時間・人員で、それをもとにしたディスカッションまで行えるのか。

・（今後の推薦・AO などでは）3 年間を通した変容や身に付けた能力を客観的・具体的に表現する必要がある

⇒　学習の成果は"点“ではなく、"プロセス”で考えるべき。1 年間～複数年の長期スパンでの変容を評価。

⇒　生徒と教員が、求められる能力と現状・変容について共通の認識を持つ必要がある。

⇒　活動とともに変容が生じている“事実”を可視化できる手段が必要。活動と、それに伴う成長を裏付ける客観的なエビデンスを示せるかどうか。

⇒　生徒自身がその変容を表現できるようにすることは必須。Ex)京大教育推薦「学びの履歴書」

⇒　これまでの推薦入試に見られる教員所見のようなあいまいな表現ではなく、具体的な記録を残す。

⇒　自身の研究をどのように理解し、どのように発信できるのか。

⇒　生徒は振り返り作業により、自身の活動や成果について理解を深める。努めて積極的に行うべき。

・標準ルーブリックを使うことに対して感じること

⇒　主観型入試と客観型入試の行き来が続いている。ハイブリッドは評価が難しい。本来主観型の代表格であった AO などを、ルーブリックを用いて客観型に寄せると理解している。

⇒　同じく、客観性のみを求めていた一般入試に主観を含める手段にもなる。

⇒　評価対象に対する、シンプルな【○・×】は大概一致する。【△】を評価するためにルーブリックは非常に有用。これまでうまくいっていなかった部分でもある。

⇒　まずは現場全体で理解すること。高校でそうであるように、大学としても、ルーブリックの意義や意味についての理解を広げることは容易ではない。

⇒　昨年度の京大教育の推薦入試でアストロノート試験を参考にルーブリックを作成・使用。ものすごい手間と時間がかかったが、批判的な声についての風向きが変わる。成果はまだわからない。

・その他の雑感（講評など）

⇒　専門力と汎用力のバランスはなかなかとれない。

⇒　統計処理に関する力が弱い学生が増えてきた。高校での指導とともに、それらを測る指標がほしい。

⇒　“独自”ではなく、”共通”ルーブリックがあることで、AO 入試や推薦入試への対応がしやすくなる。

⇒　今までの物差しでは測れないものを用いて大学に入ることになる。高校の進路指導方略の切り替えも柔軟かつ迅速さが求められると感じている。同時に大学も。予備校や B 社はどう出る？

⇒　大学では、ルーブリックをドクターの学生のインターンによる能力の伸長などに用いた例も。(当初、教員からは反対意見が目立つも徐々に理解が広がる)

⇒　これまで、ルーブリックはシステムや事業の評価には非常に有用だが、入試など、“結果”の評価にはそぐわないとされてきたのは、理解が追いついていなかったこともある。現在はビジネス・プロスポーツなど様々な場面で活用。手段の一つとして理解を深める必要があるし、そのためのコミュニケーション自体にも意味がある。

⇒　新たなものに対する異物感は根強い。

⇒　現時点での評価方法としては最も理にかなったものの一つだが、悪用もできてしまう。

⇒　高校入試もそうだろうが、今日の大学入試には社会的制約や公平性を強く求められている。

⇒　全ての受験者・教員が探究的な学習を経験しているわけではなく、大学の求める人物像や入試の目的が伝わるまでに時間がかかる可能性。コンテクストの形成を。

⇒　評価を精密精緻にしすぎない方が良いのかもしれない。

⇒　面接官の直感はわりと打率が良い。今のところ。ルーブリックや数字を指標とするよりも。
Ex)阪大基礎工の推薦入試

⇒　標準化したものからイノベーション人材が生まれることは、過去あまり例がない。一般的な視点からは"ハズレ“とされた人がそのような人材となっている。

⇒　このような取組で教育の質は確実に向上する。しかし、それとイノベーション創出を結びつけることは難しい。

⇒　本当に高校でイノベーション人材を創出しようとするならば、教員の思い通りに学ばない人材・カリキュラムを裏切る人材をどのように評価し、活かすかという課題がある。

⇒　ジグソーパズル（≒センター試験）を効率よく解く能力を否定するつもりはないが、特段の評価ポイントとも言えない。

⇒　問題意識ばかりが高く、方法論にたどり着かない学生はまるで政治家。高校でそれらの接続プロセスを学ぶことができるのは、大学で学ぶ意味を知ることにもつながるはず。

⇒　研究について、新規性の重要性ばかりをことさら強調する人がいる。そんなに簡単なものではない。

⇒　プロセスの正確さ・フローを知ることは、全ての学問につながる作法を知ること。

⇒　"標準”・"均質化“ということのプラスとマイナスをよく考える必要がある。

⇒　高校教育は専門教育化しなくても良いのでは。

文部科学省より

・講評など

⇒　新大学入試について、理解が不足することで、課題研究の成果のみを目的とする危惧がある。本来の目的（探究プロセスの獲得・主体性の育成）を殺しかねない。

⇒　各校の取組を、学校内外で共有してほしい

⇒　高校でのプロセスを大学に示すことの難しさを感じている。

⇒　評価方法の検討や周知は生徒のみではなく、教員の成長にもつながる。

⇒　現場と行政の認識を合わせていきたい。

⇒　「理数探究」は SSH 事業を踏まえてのもの。各校の事例が、そのまま新たな学び方のベースとなる。

⇒　プロセスが形になり、客観性を持って評価できるようにするため、お力をお借りしたい。